

今から50年以上も前の、ある夏の夜のことが、父を想い出すたびに甦ってきます。それは両親と私と弟が一つ蚊帳に入って間もなくのことだったと思います。少し離れた道路でトラックの音がしたと思うと橋を渡ったところで停まりました。今と違って自動車が夜通ることなど珍しい時代です。やがてどやどやと数人の足音と共に「今晚は」「今晚は、白木福一は居りますか」とその声に、すぐ出て行った母が引き返しました。子供心にも何か異様なものを感じましたが、やがて父を早く出すよう急かされると母は、一段と大きな声で「罪人じゃありません、別れの水盃をする間位待つて下さい」と言いました。それと「愛生園へなら絶対行かせません」と言ったのは父が愛生園から逃走して帰っていたからでした。その時代は、どここの療養所も変わりはないかと思いましたが母にすれば愛生園が特別に厳しい所と思えたのでしょうか。逃がしてはならないかと思ったのか、家の裏にも張り込んでいたようで足音がしていました。やがて父を乗せたトラックの走り出す音を蚊帳から出ることも怖く聞いていました。

私の両親は現在話題になっている夫婦別姓だったのです。母が一人娘のところへ、長男の父が婿としてきたからです。上から3人、長男、次男、長女を河野姓に、三男、次女、四男を白木姓にしたそうですが、私がもの心ついて知っているのは次男、長女と弟だけでした。私と3つ違いの弟は小学校へ入学した5月に急逝しましたが、父が家を出る時、歳だった弟は、父の白木姓を継ぐべき大切な子供でした。それだけにショックは大きかったと思います。

それからの父は時々私に少女雑誌を送ってくれていましたが、中でも忘れられないのは大佛次郎の「冬の太陽」という単行本でした。本を買ってもらえるなど珍しい時代で、嬉しくて近所の友達に見せたことを憶えています。弟を失ないただ一人残った白木姓の私を大事に思ってくれていたのかなあと、今になって思います。

父が入所してから、母や兄は一年に一度は面会に行っていました。私が初めて療養所を訪ねたのは中学三年の秋でした。母に連れられ父の居る特別重不自由寮へ行き、土間に立つと「あの押入れの前に座っている一番右がお父さんよ」と、言われても信じられませんでした。目が見えなくなっていることは聞かされていても、すぐに自分の父として声をかけることはできませんでした。側に寄ると「笑ちゃんか、よう来てくれたね」と優しく呼ばれても、涙は出て声は出ませんでした。あの時の気持ちはどう表現していいのかわかりません。

それから4年後の昭和30年1月28日、旧正月に再び青松園行きの船に乗ったのは私の入園のためでした。前日の夕方家を出てバスに乗りしましたが、その停留所には近所のおばさん3人も見送って下さいました。母と二人で岩国から夜行列車に乗り込み、顔色の悪かった私は窓側に上着をかけ、それで顔をかくし、ただ早く大島につくことだけを考えていました。父の様に強制されての入園ではなく、2年くらい前に火傷をしたこともありましたが、母はそのことについて何も言ってくれませんでした。自分でも父と同じ病気だなんて思いもしませんでした。そのままに過ごしていました。入園する前年の夏頃から左の眉毛が少しずつ抜けるのに気づき、何となく父の病気は眉毛が薄くなることだけ知っていて、母に「私はお父さんと同じ病気になったんじゃないの」と問いつめました。それから、毎日のように、「私を早く連れて行って」と、母を急かしていました。父に連絡をとっていたのか、今は一年も治療をすれば治って帰れるらしいから行くか、とやっとう重い腰を上げてくれたのでした。

たった一人となった白木姓の子供が病気になったことで、父の苦しみは大変だったと思いますが、その時の私はそこまでの気は回りませんでした。その後、戦中、戦後の療養所の生活ぶりを聞き知ってから、不自由な体の父が子供の為に節約したお金で本を買って送ってくれていたのだと沁みじみ申し訳ない思いがしました。

そして長い間大部屋生活から解放され、改築とはいえ個室に入ることが決まった矢先、普段から頭痛もちでしたが、頭の後ろの方の痛みを訴えつつ十日位の入室で亡くなりました。少しずつながら園内のくらしも楽になり始めた時期でしたし、どうしてこうも運の悪い父だろうと悔やまれました。父のことを想い出すと、今もあの夏の夜、母の言った「罪人じゃありません」が、涙とともに浮かんでくるのです。